

令和元年度 地域力パワーアップ大会

日時 令和元年10月27日（日）11時30分～14時15分
場所 松山東雲女子大学・松山東雲短期大学 A-1-1 教室
主催 松山市（市民参画まちづくり課）

出席者

野志市長、津田市民部長、井出市民副部長、前神市民副部長
松山市コミュニティ・アドバイザー 讃岐幸治 氏
若松進一 氏
前田 眞 氏

次第

開会

松山市コミュニティ・アドバイザー紹介

大会趣旨説明

事例発表

- ・桑原地区まちづくり協議会
「桑原地区まちづくり協議会～10年の歩み～」
- ・松山東雲女子大学・松山東雲短期大学
「朝食を食べよう！野菜を食べよう！『愛顔の E-IYO プロジェクト』
しののめベジガールの取組み」
「保育における児童文化財の役割 - エプロンシアターを中心に -」
「しのモン応援隊『西日本豪雨災害～被災地とともに～』」
「こども教育実践センターの役割～こどもを軸にした地・産・官・学の新たな協働
体制の構築とプラットフォームをめざして～」

内容

1. 松山市コミュニティ・アドバイザーの紹介

2. 事例発表

◆桑原地区まちづくり協議会

桑原地区まちづくり協議会～10年の歩み～

- ・桑原地区まちづくり協議会が平成21年5月に設立され10年が経った。

- ・準備会から協議会までは、地域のイベントに協賛や独自活動等に取り組んだが、会長や事務局長が町内会へ何度も参加協力のお願いや説明に出向き、多くの意見をくみ取る努力をしていたことを改めて思い出す。



- ・設立時はまちづくり計画の作成が一番大変だった。策定にあたりワークショップやアンケート調査結果を参考に何度も協議を重ねた。
- ・まち協主催の事業と活動を支える担い手を作る活動に力を入れてきた。
- ・協議会は9つの部から成り立っており、部独自の活動や横の連携を取りながら、より良い活動に向けて努力している。
- ・協議会主催のフリーマーケットは春の風物詩となりつつある。バザー会場は地域住民たちで溢れ、地域の交流の場となっている。

- ・桑原地区の宝である淡路ヶ峠^{あわじがとう}は、松山城を中心に松山市を一望できる素晴らしい景観。現在は淡路ヶ峠遊歩道整備管理協議会とまち協の環境開発部が連携しながら、登山道3ルート of 整備と管理を行っている。
- ・保健福祉部の活動について紹介。福祉マップは、松山東雲大学と協働で進め、平成24年に作成した。第2版も平成27年に発行している。その他にも平成29年から畑寺児童館と連携した取組の「でらうま食堂」などの活動もしている。
- ・教養文化部では、食文化・異文化交流として、大学の留学生と大学生、中学生を含めた地域住民と一緒に料理をすることで、文化の交流を図っている。
- ・情報発信部では、まちづくり通信を年3回、全戸に配布している。最新号は42号。
- ・ホームページはしばらく滞っていたが、今年度学生の活動により再開した。
- ・防災に関する講演会や研修を行っている。
- ・活動を支える担い手づくりとして、大きく3つあり、青壮年有志の会、まちづくり学生部、桑原ジェンヌを立ち上げた。
- ・青壮年有志の会は、平成27年10月に桑原地区各町内会青壮年関係団体に呼びかけ、協議会の参加団体として立ち上げた。淡路ヶ峠展望台周辺清掃活動などを行っている。
- ・学生部は、毎年4月に愛媛大学農学部新入生説明会で協議会の紹介と勧誘を行っている。夏休みには学生部による企画として、小学生対象の自由研究の補助を行っている。
- ・平成29年12月に桑原独自の女子会、「くわばらジェンヌ」を立ち上げた。現在の会

員は25名。まち協事業のお手伝いなどを行っている。

- ・まちづくりとは住民がより良い生活が送れるようにハードとソフトの両面の改善を図ろうとするプロセスだと思っている。
- ・本日の桑原地区まちづくり協議会設立10周年記念大会・地域力パワーアップ大会をきっかけとして一層この桑原のまちがパワーアップしていけることを信じている。

◆朝食を食べよう！野菜を食べよう！『愛顔のE-IYOプロジェクト』

しののめベジガールの取組み

- ・しののめベジガールは愛媛県民の朝食摂取、野菜摂取向上を目的に活動している。
- ・私たちがかぶっているこの野菜帽がトレードマーク。
- ・短期大学のため、毎年代替わりをしており今年が3代目となる。
- ・今年が全員で30名。
- ・愛媛県の若者の朝食摂取、野菜の摂取量が少ない現状から愛媛県がロゴを使った愛顔のE-IYOプロジェクトを2016年に立ち上げたことから始まった。
- ・2019年度の活動の柱は、行政との連携事業、地域への啓発活動、企業との連携事業の3つ。
- ・行政との連携事業は東温市健康フォーラム2019でしののめベジガール考案の1杯で不足分の野菜が採れるスムージー3種類を試飲いただくスムージーコーナーと、食生活改善普及運動月間をPRするステージ発表をした。
- ・地域への啓発活動は、お城下マルシェ花園にて、愛顔のE-IYOプロジェクトのリーフレットを配布するとともに、2種類のスムージーとにんじんとほうれん草のシフォンケーキを販売。その他、入学者選抜説明会や東雲祭でもブースを出し、PR活動を行っている。
- ・企業との連携事業は、フジエミフルMASAKI店で、2日間、カゴメ株式会社の新商品発売イベントでスムージーコーナーを担当させていただいた。
- ・「健康フェスタ in アイテムえひめ」では、体験ブースでカゴメ株式会社によるオリジナルトマトケチャップを作ろうという食育活動支援イベントが開催され、小学生以上の親子を対象に、若い世代の朝食摂取や野菜摂取を習慣化させる活動をPRさせていただいた。
- ・帝人株式会社との連携について紹介。帝人がオーストラリアの企業と日本で独占共

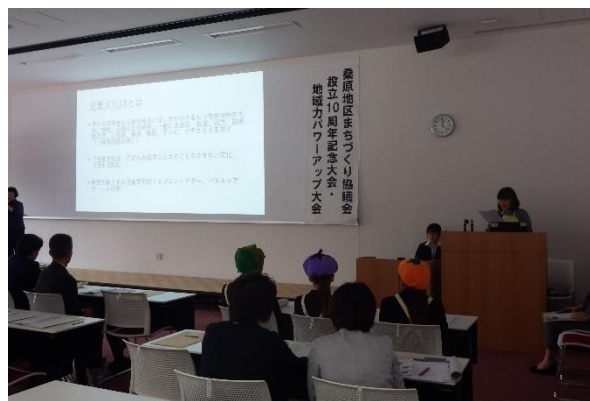


同開発契約を締結したスーパー大麦と愛媛県が生産日本一のもち麦を混ぜた麦麦ごはんを開発した。

- ・大塚製薬株式会社、株式会社フジとの連携事業の紹介。F マルシェ古川で、愛顔のE-IYO プロジェクトのPRを行った後、山田農園に移動し、小学生親子 21 組と大豆の種植えをした後、料理教室を行った。
- ・情報配信や広報の積極的活用によって、自分たちの活動が人目につきやすくなり、それを見た人からの反応や応援の声が直接聞けることで、やりがいや今後の活動の励みにもなっている。
- ・今後の課題として、啓発活動を継続し、多くの地域の皆様のより良い食生活への気づきを促し、食生活改善につながる活動をしていきたいと思う。
- ・今後も機会があれば地域活動に積極的に関わり、常に当事者意識を忘れず、この取組の中で培ったものを社会の中で発揮していきたいと思う。

◆保育における児童文化財の役割 - エプロンシアターを中心に -

- ・松山東雲女子大学では、成績優秀な学生たちが自分なりの研究計画を立てて、地域をフィールドとして地域課題に取り組む科目、インディペンデントスタディ（自律的学習）を開講している。
- ・学びの分野を超えて、実践的に調査、研究活動を行っている。
- ・ここから、保育における児童文化財の役割～エプロンシアターを中心に～の発表。
- ・石井桃子氏は「子どもたちよ、子ども時代をしっかりと楽しんでください。大人になってから、老人になってからあなたを支えてくれるのは子ども時代のあなたです」と述べている。つまり、子どもの時に多くの児童文化財と関わることでそれが大人になったときに自分の支えになるといえる。
- ・現代の子どもを取り巻く状況は、大きく変化している。昔は、近所の子どもたちと近
くの公園でたわいのない話をしていた。しかし、現代では、電子機器が発達し、子どもたち同士の会話が、スマートフォンで行われている。
- ・2017年のベネッセの0歳後半から6歳児のスマートフォンに接する頻度の調査によると、ほとんど毎日と回答した母親は、21.2%で、4年前の約2倍であった。特に0歳児の割合は、4年前はわずか3.5%だったが、2017年は20%に増加してい



た。そのため、昔の子どもに比べ、コミュニケーション能力が低下している傾向にある。

- ・ 児童文化財とは麻木直美氏によると、児童文化は子どもの発達に欠かすことのできない文化と述べている。つまり、児童文化財とは、自分が成長する中で、深く発達と関係して、欠かすことのできない文化であるといえる。
- ・ 研究対象とする児童文化財では、エプロンシアター、パネルシアター、人形劇。
- ・ エプロンシアターとは、エプロンを使った児童文化財(エプロンを使った人形劇)。保育者が子どもと向き合っていることもあり、表情や声で物語がより伝わりやすくなるという特徴がある。
- ・ 中谷真弓氏は、生活・保育という日常性の世界とは別に、エプロンと演じ手、そして子どもたちが一体となって作り上げる夢いっぱいの世界がエプロンシアターだと述べている。
- ・ エプロンシアターやパネルシアターを基に、色々な地域の活動をさせていただいた。これらの経験から、低年齢児に手作りの文化財の良さと発達に合わせた語りや演じ方で2つの事が明らかになった。
- ・ 1つ目は、低年齢児の子どもたちはお話の内容よりもパネルの感触に興味を持っている。
- ・ 2つ目は子どもたちの発達によって異なってくるが、色々な感情を生ませ、能力を上げているように感じる。
- ・ この研究・実践を通して、今後さらに地域でのお話会の重要性について深めていきたいと考えている。
- ・ 保育園、幼稚園などの集団の保育、教育施設以外の地域での文化活動の重要性、園と地域との連携の必要性について明らかにしていきたい。

◆しのモン応援隊「西日本豪雨災害・被災地とともに」

- ・ 2016年の熊本地震をきっかけに誕生した被災地支援団体。
- ・ 女性と子どもに支援を届けるため、チャリティーバザーや被災地訪問で被災状況を学ぶなど地域の人と交流を行い、昨年の西日本豪雨でもチャリティーバザーなどで資金を調達しながら何度も被災地を訪問。
- ・ 被害の大きかった大洲市、西予市、宇和島市の児童館を訪問し、自然素材遊びや「青空お絵描き教室」の手伝い、イベントでの託児などを行った。
- ・ このような活動を進化させるため、今年度からインディペンデントスタディの一環と



して活動を計画し、実践。

- ・子どもたちに対して継続的な支援、さらに、新たな視点での活動に取り組むこととなった。
- ・昨年の活動を通し、子どもたちは遊びを通して回復する力があると気付いた。
- ・遊びを通して子どもたちの変化を感じ、災害時にこそ子どもたちにとって遊びが大切であると実感。
- ・お絵描きケアに参加した保護者や児童クラブの先生からの意見により、継続的な支援の大切さを実感。
- ・子どもたちに支援を届けるためには被災地での受け入れ体制も必要。昨年の活動で築いた信頼関係を活かしたい。
- ・また、被災地のミカン山見学を通し、新たな視点として経済復興支援も考えている。
- ・災害時は在宅被災者、自宅避難者と呼ばれる避難所以外で避難している人がいる。
- ・避難所以外に避難している人への食事はボランティアで対応するしかない。
- ・避難所の食事は栄養が偏り、体調不良を訴える人や嚥下困難な人もいるので、栄養士の専門的な知識が必要となる場合がある。
- ・地域の避難所でもあるキャンパスでも活用方法の検証や学生でも取り組みやすいローリングストック（日常生活で消費しながら備蓄すること）の提言を進めたい。

◆こども教育実践研究センターの役割～こどもを軸にした地・産・官・学の新たな協働体制の構築とプラットフォームをめざして～

- ・センターの名称が長いので、地域では「こどもセンター」の愛称で呼んでいただきたい。
- ・2018年9月に地域、保育、幼児教育、子どもに関する産業以外にも様々な企業や地域の子どもに関する取組で本学を通過してほしいとの思いから設立。
- ・2月9日のセンター開所式では、地域の方々にも参加いただいた。
- ・大学の教育力、研究力を活かし、地域組織の取組の成果や課題に対する情報収集、改良に向けた提案を一緒にしていきたい。
- ・本学には実践力と500数名の若い女子の力がある。この女子と教員のマンパワーを活かし、県内、市内の子どもを軸にした課題について取り組み、必要とされるプラットフォームを目指したい。
- ・本学は「保育の東雲」と言われてきた。
- ・保育業界が抱える子どもを軸とした課題に取り組むべく、モデル事業として本学の卒業生（県内保育士約6割のシェア）に対し、保育士の早期離職を予防する初任者研修を実施。
- ・本学には子どもに関する専門家が多いので、県内の保育業界が主催する研修講師として積極的に貢献したい。

- ・松山市とは市内の保育士と保育力アップを目指し、研修の企画段階から担当課と協働。
- ・今後は子どもを軸にした地域の取組に対し、研究や人材提供を中心とした地域支援者の養成を実施したい。
- ・センターの取組ではないが、松山市内の保育実践スキルを開発する共同研究に参加している。
- ・地域のプラットホームとなれるよう、やる気やノウハウを持って実践していきたい。



◆市長あいさつ

◆山口県立大学食育プログラム開発チーム食育戦隊ゴハンジャー

- ・子どもが楽しみながら食について学んだり、自身の食生活改善への気づき、家庭につながるプログラムを考えている。
- ・平成 18 年度からの継続した取組が認められ、農林水産大臣賞を受賞
- ・取組は大学の単位にはならないが、子どもや食に興味がある、企画を考えてみたいなど関心ある学生や教員が集まり活動している。
- ・活動フィールドは幼稚園、保育園、スーパーなど子どもたちが日常生活でよく行き、興味を持つ場所。
- ・様々なキャラクターや教材を考案しているが、特にゴハンジャーが人気。
- ・ゴハンジャーは三色食品群をイメージ。黄色はお米、赤色は鶏肉、緑色はピーマンがモチーフ。
- ・キャラクターが各地に出向き、子どもたちのヒーロー的存在になり、楽しみながら子どもたちの食への興味関心を引き出している。
- ・ゴハンジャーが食べ物の働きをイメージできるポーズをとり、言葉だけでなく体を使って子どもたちが食べ物の色と働きを結びつけやすい工夫をしている。
- ・「元気な身体 赤・黄・緑」を魔法の言葉として子どもたちに伝え、プログラムの中で繰り返し自然に覚えてもらうようにしている。
- ・劇中にゲームを取り入れており、それをクリアすると「不健康（キャラクター）」を倒せるような仕組みになっており、子どもたちはより活動に集中する。
- ・対象者や活動によって教材を使い分け、効果的に子どもたちの興味関心を引き出せるようにしている。（旬の食べ物カード、食の流れカード、視覚紙芝居など）



- ・活動に参加した子ども以外にも多くの子どもに食の大切さを広めるため、参加者以外にも絵本やワークブックを作成し、無償配布している。
- ・五感を用いて様々な食べ物と触れ合う機会を増やす教材としてハテナボックスも作製。
- ・地域の特産物を入れることで、地元の食べ物を知るきっかけが作れる。



- ・子どもたちにより理解を深めてもらうため、断面当てゲームは写真だけでなく、野菜や果物の模型を作製。
- ・小学校高学年では子どもたちにミニゴハンジャーになってもらい、低学年に食育を行っている。
- ・スーパーで行う食育では、小学校低学年を対象に調理体験などを通して食に対する興味関心を深めること、食に関わる人への感謝の心を持つことを目的としたプログラムを実施。
- ・児童センターなどでは自作教材を用いて自由参加型のプログラムを行い、親子や兄弟で参加することで家庭での望ましい食習慣を作るきっかけにしている。
- ・プログラム実施後のアンケートでは6割以上の園児がゴハンジャーと三色食品群を関連付けながら思い出していた。
- ・子どもたちの生活の場（現地）に行くだけでなく、そこにいる子どもと身近にいる先生と連携することで子どもたちにとっても親近感が湧きやすい。
- ・今後はオリジナル教材を多くの人に有効活用してもらえるよう、プログラムごとに対象者や目的、活動内容、活動に必要な準備物、台本などを食育実践ブックとして作製したい。

3. アドバイザーの講評

【讃岐 幸治】

- ・「理論なき実践は空虚なり」という言葉があるが、地域と大学も同じである。どちらかが欠けてはいけない。一緒になってどんどんやっていってほしい。
- ・現在ラグビーワールドカップが開催され、国外出身の選手が日本代表の1つのチームとして戦っている。これは、異なる団体が1つの目標に向かって活動するまちづくり協議会と似ている。
- ・お互いの持ち味を出し合うことで、足し算ではなく掛け算になる。思いもよらない奇跡が起こるかもしれない。



【若松 進一】

- ・今日の事例発表を聞いて若い人もなかなかやるなと感じた。
- ・現在、自衛隊や警察、ボランティアなど様々な団体が災害に対応しているが、大学生が地域に出ていく、このような時にこそ若い力が必要だと思っていたところだった。
- ・大学は存在するだけではなく、若いパワーを発揮することが大切。
- ・桑原地区まちづくり協議会のまちづくりは若いパワーがとても生かされている。
- ・今大会のように地域をめぐって、地域のパワーを肌で感じる事ができた。
- ・まちづくり協議会の皆さんの思いが未設立地区に対して設立の力になる。



【前田 眞】

- ・今回の事例発表者は地域課題を自分なりに見つけ、自分たちの得意技や得意分野を使って課題解決に取り組んでいる。
- ・地域やまちづくり協議会は地域課題を我が事として考えたときに、自分たちだけではなく、大学生などにも呼び掛けてほしい。
- ・自分たちだけでは解決できない部分を一緒になって、地域や大学が互いに声を掛け合える関係を作っていってほしい。

